

# 女の視点で見える農業経営



## 自宅でOLしているようなものでも、充実度は主婦+OL以上 みんなの役に立てたら とってもうれしいですから 小田川 淑子さん

おだがわ・よしこ/昭和45年6月24日生まれ。青森県南津軽郡波岡町出身。青森県農業大学校稲作科を卒業後、小田川景行さんと結婚し就農。義父太さん(63歳)、義母蝶子さん(63歳)、義姉恵子さん(41歳)とともに、10haの水田で生産する無農薬栽培米の産地直送販売に取り組む。長女の真輔ちゃん(3歳)、長男徳太郎君(1歳)の母。  
〒038-31 青森県西津軽郡木造町大字豊田字網代23-1「すこやか農場」☎0173-42-7117

「この家に来るまでは、この青森に産直やつてる農家なんてあるわけがないと思ってました。みんな作りっぱなしで、農協や市場に出しっぱなし。作ってしまえば、後はなんとかなると思ってる。『ああ、農家はいずれダメになる』って……」  
そんな風に考えていた淑子さん(25歳)が嫁いできたのは、青森県西津軽郡木造町の稲作農家の小田川家。

夫の小田川景行さん(37歳)の父である太さん(63歳)は、身内をガンで失ったことをきっかけに、昭和42年から無農薬有機栽培の米作りを開始した。減反政策が始まったときも、町の中でたった一人反対を表明した。農協と対立し、自力で全国を回って米を売り歩くなど、幾多の困難を経て、消費者とのつながりを築き、直接米を販売するスタイルを確立した。53年に「食べ物と健康を守る会」を設立し、さらに消費者との結びつきを深めている。淑子さんがそんな小田川のことを、人伝に聞いたのは、20歳の時だった。

「無農薬でお米を作ってる、お客さまに直接販売してる。冬にはお客さまにご挨拶に行ってる家なんだと。理想的な農家だな、これなら生き残っていけるなと思って思いました」

### 普及員の嫁が来た?

淑子さんは、南津軽郡波岡町の出身。父親は自営で板金塗装業を営んでいた。もともと農家出身の人で、近くの畑を買い取り、本業のかたわら農業を始めようとしていた。

「いずれは農協に出荷しようと思っただらしく、ニンニクを作っていました。ところが管理が行き届かなくて病気でやられたり、肥料が足りなくて大きくならなかったり。やっぱり二足の草鞋は履けなくて、いつも失敗ばかり」

淑子さんは、地元の進学校へ通っていたものになかなか成績が伸びず、進路に悩んでいた。そんな矢先、お父さんが「こんな学校もあるぞ」と教えてくれたのは、黒石市の青森県農業試験場と同じ敷地内にある「青森県農業大学校」だった。

2年制で、卒業すれば農協の営農指導員や農業改良普及員の受験資格が得られる。また、国家公務員の試験に合格すれば、農政局、食糧事務所などの農水省系の役所で働く道も開けていた。  
「ゆくゆくは公務員。安定していいな」  
という思いで入学。失敗だらけのお父さんの畑をなんとかしたいという思いもあり、当初は土壌分析を専攻する予定だったが、専門を決める寸前に、同級生に「代わってくれ」と頼まれ、断りきらずにイネの品種改良が専門の「稲作科」に進むことになる。試験場の田んぼに入って稲の丈を凶ったり、刈り分けつ数を数える毎日だった。

大学校も2年目に入り、就職活動を開始。当初の予定通り目標は国家公務員。国家Ⅱ種の試験に見事合格したものの、肝心の就職先がなかなか決まらない。再三再四、大学の研究室や役所などの面接を受けるのだが、どれも不合格。せっかく国家試験に受かったのに、これでは落ちたも同然ではないかと、悔しい思いに苛まれたが、卒業間際まで就職先は決まらなかった。淑子さんが小田川家のことを知り、景行さんとお見合いしたのは、そんな時だった。

お見合いといっても、淑子さんは、当時まだ20歳。「練習だ」くらいの軽い気持ちで出かけた。けれど景行さんの方は相当気合が入っていたようだ。自称「スキー大好きオンナ」の淑子さん。お見合いの会場にはスキー場が選ばれた。一方景行さんは、スキーを履くのはその時が生まれて初めてで、密かに練習を重ねてその日に臨んでいた。

その後景行さんに連れられて、小田川家に遊びに行くようになり、家族といっしょに、生まれて初めて自家製の米を炊いた玄米ご飯を食べた。  
「それがほんとにおいしかったの！」

# 女の視点で見る農業経営



かくしてお見合いの日から5カ月で、2人は結婚することになった。

披露宴の日、新婦側の来賓席には試験場の稲作部の職員など、大学校時代の恩師が並んだ。

「普及員の卵が来たー」って、小田川家のお客さんが、圧倒されちゃって(笑)。私は何にも知らないのに。最近になってやっとほとぼりが冷めたけど、いまだに「あそこの嫁に聞けば、なんでも知ってる」って思ってる人がいるんですよ」

## 自宅でのOJ稼業をやっている

あまりに早く結婚が決まったので、花嫁修行もままならなかったが、大学校時代の教科書と田植え用の長靴、このふたつが淑子さんの花嫁道具になった。

「実習の時、普通の長靴は短くてドロが入るから私は裸足で田んぼに入ってた。私が入ってた。それを見た先生がプレゼントしてくれたんです。サイズは22・5cmだから、特別に注文してくれて。嫁入りのときは、絶対長靴持っていくんだって張り切っていたんですよ」

とはいっても、一粒一粒の数を数えていた大学校と、商品としての無農薬米を作っている

小田川家は別世界だった。

「大学の田んぼは入るだけ。歩かなくてよかったです。ところが、ここに来ると歩かなくてダメなんです。結婚した次の年、風が強くてシロカキの後に田んぼに入れた稲藁が大量に浮いたことがあったんです。あの頃はパワーディスクを使っていた、プラウじゃなかったから、藁が完全に下まで行かなかったみたいで。それを片づけようと田んぼに入ったら、転んで全身ドロまみれ。大した仕事もしてないのに、私一人だけ汚れてる。もう悔しくて悔しくて……」

結婚当初、淑子さんが田に入ることは稀で、農作業の大半は、太さん夫妻と義姉の恵子さん、景行さんの4人でやっていた。毎朝4人分の弁当を作るのが新妻の仕事だったけど……。

「ウインナーに卵焼き。色のきれいな『高校生弁当』って作ってた。そしたら『これじゃ、力が出ないよ』って言われて。家事もゼロからじゃなく、マインナスから勉強したって感じ(笑)」

そんな失敗もなんのその。大学の稲作科を出たとはいうものの、本格的な農家での生活は初めての淑子さんを、小田川家の人たちは、「農家の嫁という類型」に嵌め込まず、「そのまま」受け入れたようだ。

ちなみに、小田家で太さんが起きるのは早朝3時半、景行さんは5時。淑子さんは、7時を過ぎることも少なくない。

「ひどい時には、朝ご飯の時間に起きてきたこと……私はもうこの家の本当の娘のような生活を送っているんです。他の農家の人が聞いたら、びっくりするかもしれない」

と、明るく笑い飛ばす淑子さん。彼女の朝寝坊にはそれなりのわけがある。

淑子さんは、消費者からの電話注文の受付や発送、伝票処理やパソコンを使っている経理事務などを一手に任されている。家の中の仕事と並行しな

がら、太さんから消費者への通信文をワープロで清書したり、新たに顧客を紹介してくれたお得意さんに礼状を書いたり毎日忙しい。

大学校時代、農業簿記や情報処理の授業を受けていたものの、当時は「まさか自分が自営するとは思っていなかった」ので、あまり真剣には聞いていなかったという。経理を任せられるようになって、改めて教科書を読みなおし、パソコンを使いこなすようになった。

「パソコンは私が来る前からありましたけど、ちよつと使いにくいソフトだったんですね。だからリースの期限が来るたびにメーカーさんいろいろ聞いて使いやすくしたり、ウインドウズの使い方を教えてもらったり。管轄外のことも、親切に教えてくれるからすごく助かってます」

電話、ワープロ、コピー、経理用パソコンに囲まれた和室。ここが淑子さんの仕事場である。

結婚3年目の平成5年2月に、長女の真輔(まほ)ちゃんを出産。初めての育児も加わって、ただでさえ多忙を究める時期なのに、その年の冷害はその忙しさに拍車をかけた。津軽地方の稲作地帯が軒並み大打撃を受けたこの時期に、小田川さんの田は平年並みの反当14俵もの収穫を上げた。米不足に悩む消費者たちからの電話がひっきりなしに鳴った。

「あの年は、電話が鳴りっぱなし。あんまり鳴るもんで、家族みんな気が狂いそうだった。よく乗り越えたなあ。百姓仕事より辛かった」

中には「金はいくらでも出すから、私だけに譲ってほしい」などという不屈きな声もあったが、それほどの売り市場だった。しかし、小田川さんは敢えて値段を上げなかった。喉元過ぎれば……で、豊作になれば、掌を返したように離れて行く人がいるのもまた事実。毎日電話の前で仕事をしている淑子さんには、そんな消費者の動向も手に取るようにわかってきた。



「お客さんが健康でいてほしい」そんな気持ちが「ありがとう」の言葉になって返ってくる

## 二つの「ありがとう」に支えられ

大学時代は、県の特別栽培米の開発の経緯なども身近に見る機会もあった。しかし、今では米の品種やブランド名を売り物にしようとする生産者や、またそれに振り回されている消費者のあり方に疑問を感じるようになった。

小田川家では、無農薬で漢方薬草から抽出したエキスを散布して作った独自のブランド「アワヤ」「ばにあ」「長寿」の3種類を、産地直送で販売している。これらは米の品種名は明記していない。「ばにあ」は1750円、「アワヤ」と「長寿」は同1000円。一般に出回っている米に較

べても決して安くはない。

「うちのお客さまには、癌になって食餌療法している方もいるし、今は健康だけど体にいいものを食べたいという方もいます。中にはお米を作っている人の顔が見たいと、直接家へお見えになる方も……私たちがとにかく食べてくださる方たちが健康で、幸せになってほしいから、愛情いっぱいかけて作ってるんです。うちの米には目に見えないエネルギーがたくさん詰まっている。それをわかってくださる方に食べていただきたい」

その「見えないエネルギーの」価値を、実感している消費者には、決して高いものではない。この5年間に、淑子さんは、品種でもなくブランドでもない、そんな「お互いの顔の見えるたしかな米作り」を、実感してきた。

昨年1月には長男徳太郎君を出産。家の中の仕事が多いとはいえ、仕事にならなくなるので2人とも保育園に預けている。それでも農繁期に注文が殺到すると、「パニック」に陥ることも少なくない。

天麩羅を揚げる時に電話が鳴ったり、電話の途中で子どもがウンチをしたり、おっぱいをほしがって泣きだしたり……注文や問い合わせの電話が来たら、家事を投げつけてそのまま机に向かうこともしばしばだ。

「自分の家において、OLやってるんですから、面白いですよ」

今、淑子さんは25歳。世の中にあるんな25歳の女性がいるとして、自分の25歳は単純に「専業主婦+OL」より、なんだか充実しているように思えるという。だとすればその「プラスα」とは何なのだろう？

進学に悩んだ高校時代、大学を出てもなかなか就職が決まらなかった時、淑子さんは自分の力を発揮できる場所を見つけられずに「鬱々」としていたというけれど、今ではそんな昔の出来事はウ

ソのようだ。嫁入り前後の失敗談や苦労話も笑い飛ばせるほどの余裕すら感じさせる。そして何よりも、自分の仕事に、自信と誇りを感じていることが伝わってくる。

太さんは、かねがね自らの米作りの目標を、手を広げて「大規模化」することではなく、人間の健康作りに役立つ「世界一の米」を作ることに掲げてきた。淑子さんの「プラスα」とは、そんな家族ぐるみで取り組める「誇りと夢」が持てることなのかもしれない。

そんな淑子さんの毎日の楽しみは、顧客から届く郵便振替用紙に添えられた通信文を読むこと。「今月も無事届きました。ありがとう」、「今忙しい時期ですけど頑張ってくださいね」といった、ちよつとしたメッセージが、ものすごく嬉しい。

「うちの嫁さんの立場は、稲にたとえれば根っこの部分。外からは見えないけれど、それがなければ、全部枯れてしまう。そこはちゃんと評価しないと」

と、太さん。家事や育児との境界線が見えにくく、ともすれば「やって当たり前」と思われがちな農家の営みを、「仕事」としてちゃんと評価してくれる家族がいることも、淑子さんの大きな張り合いになっているようだ。家の中の仕事はもちろんだが、だんだん外の仕事も受け持つ機会が増えてきた。

「みんなの邪魔になったらどうしようって不安になったこともありました。それでも仕事を与えられて、家族に「助かった。ありがとう」って言われた時は、とつてもうれい」

今年の田植えの時も、「花嫁道具」の長靴を履いて田んぼに入った。

「おつとつとつて、ちよつと危なかったけど、今年はずはなかったですよ」

とニコリ。小田川家の「根っこ」は、だんだん強く深く根づいてきたようだ。(三好かやの)